



今年の漢字

先日、「今年の漢字」が発表されました。2025年の漢字は「熊」で、選考理由として熊による人的被害、経済的被害が多発したからということでした。九州には熊の生存が確認されておらず、九州に住む私たちは身近に感じにくいかもしれませんが、人と自然との共存という点では考えさせられる話題が多い年だったかもしれません。

さて、みなさんの今年を漢字一文字で表すと、何でしょうか？私自身で言えば「創」の漢字が浮かびます。3つの小学校の統合、令和10年度に向けた義務教育学校の準備、それは新しいものを「創（つく）」ることだと感じているからです。

これまでの伝統や歴史を生かしつつ、単なる継承—前例踏襲—ではなく、これからの時代に即した新しい形にしていく**創造力**をもってこれからも臨んでいきたいと思えます。

来年の干支

来年の干支は「午」です。干支では「馬」ではなく「午」を使うことが多いようです。

午という漢字は、餅つきに使う杵（きね）に由来しているそうです。そして、杵が上下する様子から、物事が交わったり向きが変わったりすることを意味するそうです。

また、動物の馬の象徴として、健康や豊作、発展や努力の実り、成功や繁栄の象徴とされることがあるそうです。

子どもたちの努力が実り、充実した学校生活を送れるよう研鑽を重ねていきたいと思えます。

二学期終業式直前の学年閉鎖措置で、何かと落ち着かない学期末となってしまう申し訳ございませんでした。あと1週間ほどで冬休みです。引き続き、健康の維持管理に努め、楽しい冬休みを迎えさせていただければと思います。



不易と流行

「不易」とは、いつの時代でも変わらないもの、「流行」とは、時代によって移り変わりがあるものということができます。実は、教育の世界にもこの「不易」と「流行」があります。

「流行」の方はわかりやすいと思います。今の子どもたちの学校生活と、自分（保護者様や地域の皆様）の学校生活を比較すると、今の子どもたちはタブレットを使ったり、エアコンがある教室で学習したりしています。生活科や総合的な学習の時間など 35 年くらい前まではなかった教科や小学校で英語の学習もしています。また、学校行事も午前中開催の運動会が増えたり、様々な体験学習が増えたりしています。

このような変化にあわせて、授業の進め方や行事の内容も変えていっています。ですから、今の子どもたちと自分の小学生時代を比較して違和感があるのも当然かもしれません。

では「不易」というと、最もぴたりくると思うのは、教育基本法の第 1 条の『教育の目的』、第 2 条の『教育の目標』ではないかと思います。

第 1 条には「**教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない**」とあります。

第 2 条は 5 項目あり、ざっくり言えば「幅広い知識と教養、豊かな情操と道徳心、健やかな身体を養う」「創造性、自主自立の精神、勤労を重んじる態度を養う」「正義と責任、男女の平等、協力、公共の精神を養う」「命や自然、環境を大切にする態度を養う」「我が国と郷土を愛し、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」ということが示されています。

これらのことを各教科や取組を通して、発達段階に応じて子どもたちに教授しているのが学校です。誰もが一足飛びに社会に出ることは難しいと思います。不易と流行をふまえた教育活動を振り返る学期末です。

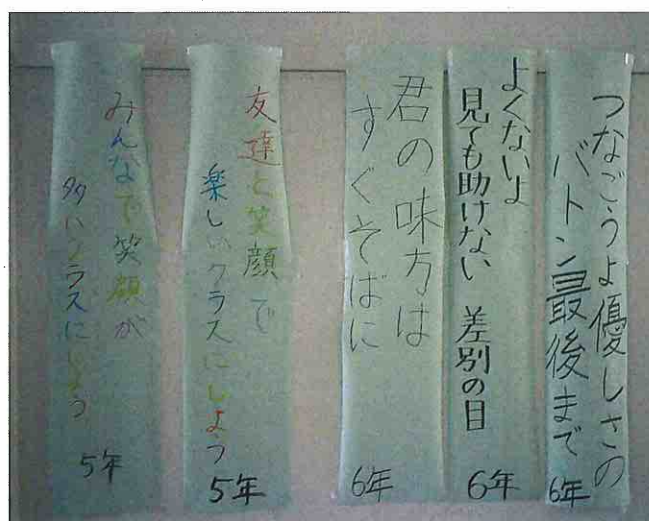
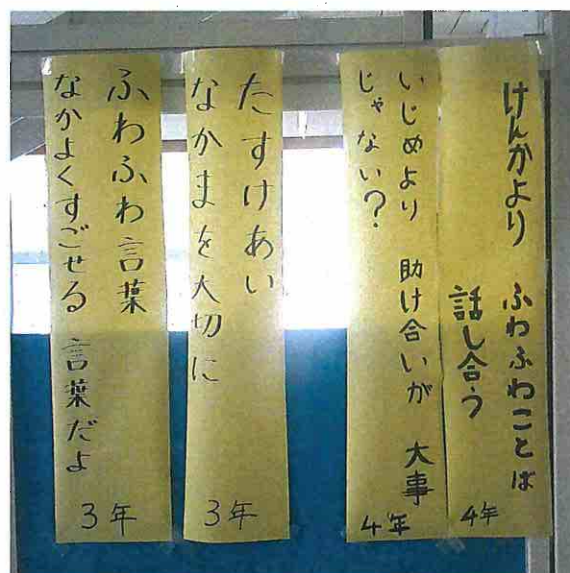
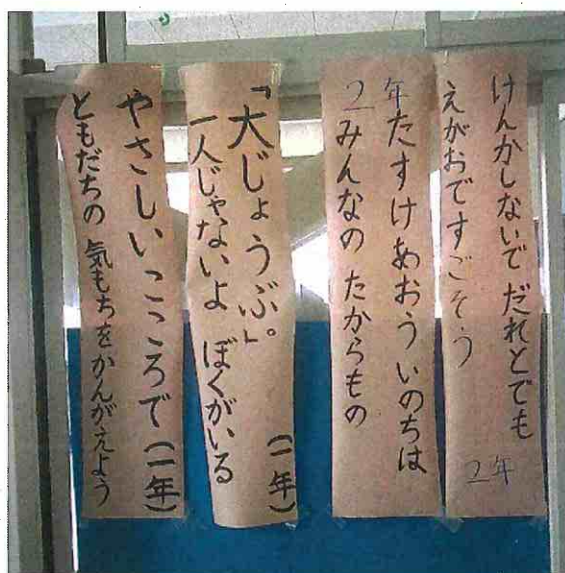
あおなみ-Blue Wave-

学校ホームページはこちらから→



なかよし集会

11月末に「なかよし集会」を開きました。この集会は人権の大切さについて学ぶ機会とすることを目的としています。その中で各学年が人権標語を発表しました。下にその標語をお示しします。



大切なのは、「実践」と「振り返り」です。自分たちが決めたことをただのかけ声にせず、日々の生活の中に生かしてこそ成果となります。

ご家庭や地域でもこの標語に基づいたご指導やご助言を子どもたちにしていただければと思います。



「なんとかなる」

先日、「小長井フォーラム」で小中学生、二十歳、新社会人の皆さんの発表を聞く機会を得ました。小学生は小長井町の未来への願いと、自分たちにできることを発表しました。小学生ならではの視点で発表できていたと思います。中学生、二十歳、社会人となると、これからの自分の目指す道や社会を担う一員としての心構えややりがいを熱く語ってくれました。年代が上がるにつれ考えが深まり、自分を律し、協働しながら自立しようとする姿勢が十分うかがえました。

では、年齢を重ねるだけで考えを深めたり、自分を律したり、協働や自立ができるようになるのでしょうか？

私の答えは「否」です。発表を聞いていると、苦い経験をしたり、迷ったり、挫折を味わったりしながら、それをも糧にして自分の道を切り拓かれておられるように思えました。

今の小学生を見ていると、できないことに直面すると、すぐくじけたり、気に入らないことがあると、長時間すねたり、誰かの助けをただひたすら待っていたりしている子が増えてきているように思えることがあります。

ただ年齢を重ねるだけで、何の努力せずに、自分の思い描いたとおりになるのなら、こんなに楽なことはないのですが・・・。

「なんとかなる」というのは、様々な手立てを講じ、やれることはやったあとに「(これだけやったのだから) なんとかなる」であって、「(根拠はないけど) なんとかなる」ではないと思います。

子どもたちが将来、自分の力で社会を生き抜いていくための「なんとかなる」を少しずつ蓄えていくことは大切だと思っています。



特効薬

インフルエンザが全国的に流行し、長崎県でも警報が出されています。お子様だけでなく、ご家族の皆様も体調管理に配慮されているのではないでしようか。

インフルエンザに限らず、病気にかかったら早く治したいと思うのが一般的かと思います。注射や服薬でたちどころに症状が回復する特効薬がほしいなあと考えることもあります。しかし、現在のところそのような特効薬の話を聞いたことがありません。できるのは予防とかかった時の治療や休養です。

さて、「子どもがゲームやスマホなどのメディアに夢中になって困っています。どうしたらいいのでしょうか」という声を聞くことがあります。子どもたちがゲームやメディアをたちどころに手放す『特効薬』は何でしょう？ おそらく、インフルエンザと同様に「ありません」が現状ではないでしょうか。

ゲームやメディアのコンテンツは、子どもに限らず人を夢中にさせるように開発されています。ですから夢中になるのは当たり前です。また、現代は情報端末（ゲーム・メディア）が生まれた時からあるのが普通な状況の子たちがほとんどです。

幼少期からそばに情報端末があり、そこから流れてくる短絡的で刺激の強い映像や音楽を見聞きし、それに慣れきってしまえば、もっと強い刺激を求めたり、一方的に受容する経験が無意識・無自覚に積んでいけば考えることに苦痛を感じたりするようになるのではないかと思います。

一方で、現代社会を生きる上で情報端末はなくてはならないものになっています。情報端末は道具です。道具は使い方しだいです。自動車も運転する人しだいで快適な乗り物にもなれば、人の命を奪う凶器にもなります。

情報端末の上手な使い方は、使うルールやマナー、モラルを身近な大人が教え続けるしかないと思います。特効薬はないのですから。



自分だけじゃ…

子どもたちに対して指導をすると、「自分だけじゃなく、他の人もしてる。自分だけ叱られるのは…」という子に出会うことがあります。

この子の理屈、どこかで見聞きしたような気がして、気づきました。交通違反をして警察官に反則切符を切られた人が「他にも違反してる人はいるだろ！」と警察官に不平不満を漏らしている場面です。

これは、みんなが違反をしているから自分も違反をしてもいいはずだという理屈になります。どう考えてもズレています。

大事なことは自分が犯した違反を反省して、今後は安全運転をしようと改めることです。そこにドライバーとしての成長があるはずです。

話を冒頭に戻します。「自分だけじゃない…」という言い訳や不平不満をまき散らすのは、自分は反省しません。また同じことをします。人間的成長する機会を手放しますと言っているようなものだと思います。

人がどうこうではなく、自分の行為をきちんと反省して同じことを繰り返さないように生活を改めることが大事なことです。叱られたということは、ある意味成長するチャンスを得たということです。

何をしても叱られず、自分の理屈ばかりを通し、他人の気持ちを慮ることもなく社会に出た人ばかりになったらどうでしょうか。

もちろん、感情に任せたり、何のフォローもない理不尽な叱り方はNGですが、子どもの改善点を指摘し、注意程度ですませられることから命や人権をないがしろにするような行為は絶対ダメだというような強い姿勢で臨むことまで幅広く指導し、最後は諭すということは私たち大人の大切な役目の一つだと思っています。

今から約 2500 年前の中国の哲学者 孔子 の言葉です。

「過ちを改めざる これを過ちという」

(よくないことをして、反省せず正さないことこそがよくないのだ)

あおなみ-Blue Wave-

学校ホームページはこちらから→



行事をとおして

11月6日（木）・7日（金）に6年生と修学旅行に行ってきました。主な見学・活動地は、吉野ヶ里歴史公園、熊本城、グリーンランドでした。

それ以外にも阿蘇の外輪山や熊本地震で崩れた山肌などを車窓から見ながら旅程を進めました。

昨今の物価高で、バスガイド・添乗員・カメラマンの随行なしでの修学旅行となりました。バスの中では6年生の子は、交代でクイズを出すなどして自分たち自身がバスガイドの代わりをしていました。

さて、修学旅行に限らず、ほとんどの学校行事で、それが終わると子どもたちは「楽しかった！」と言ってくれます。修学旅行はその最たるものかもしれません。

しかし、「楽しかった」だけでは行事を行う意義は半減、それ以下になると思っています。それぞれの行事には行う目的があり、子どもたちにはそこからの学びがないといけません。

修学旅行を例にとれば、観光旅行と異なり、歴史遺構から我が国の歴史を、集団で行動することから他者を慮る気持ちを、時間の制約があることから有効な時間配分を見通すことなど、行事が終わった後も実生活に生かすことを見出せているかで、修学旅行という行事を行った意義に違いが出てきます。

これは他の行事も同様で、学校や日常での学びを行事に、行事で学んだことを学校や日常に生かすという双方向の関係性を紡いでいくことで、子どもたちの成長を一層促していくことができます。

行事が単なる思い出作りにならないように留意しないといけないと思っています。学校での思い出とは、打ち上げ花火のような行事の瞬間的な切り取りではなく、毎日の学校生活の充実の中にあるものだと思います。



小体連

10 月 28 日（火）は、トランス・コスモスタジアムにて小体連が開催されます。種目は、100m オープン、100m 走、走り高跳び、走り幅跳び、ソフトボール投げ、4×100m リレーです。

10 月 21 日（火）の壮行会では、5 年生を中心に 6 年生へ小体連での頑張りを期するエールを送りました。また、6 年生は自分の目標を決意とともに発表しました。

陸上競技は相手と競争（走）するスポーツですが、野球やサッカー、卓球やテニス、柔道や剣道と異なる部分があります。それは、自分と競争（走）することができる点です。自分の記録更新や、やりきった達成感を味わえる要素が大きいと思います。

子どもたちにも順位に関わらず、自分の力を精一杯出し切ってくれることを何より期待しています。

グッド・ルーザー

アルファベットで書くと「good loser」で、訳すと「負けても潔い人」ということになります。

勝負事をすれば、必ず勝ち負けがつきます。勝った時は大いに喜ぶことは誰しもだと思います。しかし、負けた時の態度は様々なスポーツ中継を見ていて首を捻りたくなるものもあります。

例えば…

「ふてくされた顔や態度」「道具などの物に当たる」「今日は調子が悪かったというような言い訳」「負けたのは〇〇のせいという責任転嫁」「どうせ、自分は…という投げやりな態度」等々

一方で…

「競い合った相手の勝利を称える」「自分の力不足を認める」「次に向けて気持ちを切り替える」「次、勝利するためには…と、プランを練る」などの態度は敗者であっても清々しさを感じます。

来週の小体連ではさわやかな態度で競技に臨んでほしいと思います。



目線の高さ

今年もプロ野球のドラフト会議の時期になりました。今年は 10 月 23 日に開催されるそうです。

毎年、将来を嘱望された若者が各球団の指名を得て、満面の笑みや安堵の表情を浮かべる姿がテレビに映し出されます。

この様子を見て思うことは、彼らの目線の高さです。指名されたということは、プロ野球選手という自らの夢を叶えたということです。これがプロ野球選手になれたというゴールの選手と、プロ野球選手として実績を残そうというスタートの選手では、1 年後、2 年後の選手としての価値が変わってくるように思えます。

それは、ドラフト 1 位で入団した選手が必ずしも活躍するとは限らないからです。日米通算安打記録を持ち、メジャーリーグの殿堂入りした選手は、日本のドラフト 4 位で 2 軍スタートでした。また、昭和の名選手はドラフト外での入団も珍しくありませんでした。

何事も自分の目標をどこに向けるかで、何をするか行動が変わってきます。4 月に立てた目標に今一度目を向けて、自分の目標を見直すと、今の自分の修正点が見えてくると思います。

県展

先日、長崎県美術館で開催された「第 70 回県展」に出かけてきました。書や絵画、デザイン、写真、彫塑などの作品が展示してありました。

美術への造詣は深くない素人ですが、どれも素晴らしい作品だったと思います。その中でも特に書に関しては、何と書いてあるかわからないというのが正直なところでした。

しかし、一見すると殴り書きのように見えるその書は、実のところ卓越した技巧によって書いてあるのだらうということは理解できました。そして、その技巧の支えになっているのは、たしかな基礎基本ではないかとも感じました。どんな達筆な方も初めからその域に達していたのではないからです。このことは、他のどの作品にも当てはまることだとも思いました。

匠の技にたどりつくはじめの一步は基礎基本の習得。学校での学びも同じだと思います。



ノーベル賞

今年のノーベル賞受賞者が発表されています。先日も生理学・医学賞や化学賞を日本人が受賞しました。

日本人のノーベル賞受賞は 1949 年の湯川秀樹博士が物理学賞を受賞したのが初でした。その後 1950 年代 0 人、1960 年代・1970 年代・1980 年代が各 2 人、1990 年代 1 人でした。

ところが。2000 年代に入ると 7 人、2010 年代 12 人、2020 年代 2 人と 1 団体と受賞者数が激増します。

私見ですが、これは日本の学術レベルが世界に認められてきたからではないかと思います。また、ノーベル賞を受賞されるような方々がどのような幼少期を送られたか関心がわきます。

幼い時から優れた力を発揮されていたのか、努力の賜物なのか、おそらく後者の色合いが濃いのではないかと思います。

私たちは、学術やスポーツ、芸能などで素晴らしい賞を受賞された方々の業績をみて、羨望のまなざしを向けることがあります。しかし、その結果に至るまでの過程を顧みることは少ないのではないのでしょうか。

結果は努力の結晶です。昨今の風潮に、努力することなく結果だけを求めていることを感じる場合があります。

「努力に勝る天才なし」。いつの時代にも通じることだと思います。

諫早市制 20 周年

先日諫早市制 20 周年の記念式典に参列してきました。2015 年に 1 市 5 町が合併して今の諫早市となったわけですが、20 年前の小長井小学校の児童数は 279 人で 3 年生だけが 1 クラスで他の学年は 2 クラスでした。しかし、3 年生も 44 人で現在の学級編成の規定にあてはめると 1 クラス 22 人の 2 クラスになります。参考までに一番多かった学年は 6 年生で 53 人でした。

また記録を見ると、当時の長里小は 100 人、遠竹小は 68 人でした。3 校で 447 人の小学生がいたことになります。現在より約 300 人多かったのですね。この先の 20 年間でどのような小学生の数の推移があるか未知数ですが、子どもにとって「通いたい学校」であり続けたいと思います。